

幼児教育と生活科のつながりについて

On the Connection between Early Childhood Education and 'Life Environment Education'

藤巻 裕昌 (Hiromasa FUJIMAKI)

1. はじめに

小学校低学年の社会科と理科が廃止され、新しく生活科が新設されてから 20 年が経過した。その間、生活科に関する教育方法や教育内容について数多くの研究成果の報告^{1) 2) 3) 4)}や課題等の検討を経て、平成 20 年に現行の教育目標「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う」⁵⁾が掲げられた。さらに、今回の改訂では、幼児教育との連携の必要性について「小学校低学年では、幼児教育の成果を踏まえ、体験をしつつ、小学校生活に適應すること、教科等の学習活動に円滑に接続を図ること」などの課題や幼児期の教育に果たす生活科の役割等が言及されている。生活科（小学校低学年）を見据えた新しい幼児教育カリキュラムを提案し、幼児教育だけでなく、小学校教員としての資質をも有した学生の輩出が責務であると考ええる。

本研究は、平成 22 年度より新カリキュラムを構築することを目的に行った講義の実践例であり、いくつかの知見が得られたので、ここに報告する。

2. 幼児教育の授業実践

(1) 体育基礎技能 A・B

授業の目標は、保育の内容を理解し、子どものあそびを豊かに展開するために必要な知識や技術を習得することである。また、講義の内容は、表 1 に示すように、小学校低学年に導入されている「生活科」の単元とのつながりを考慮して、あそびの内容・方法および具体的な展開例が学べるように工夫した。

授業の形態としては、まず教師が手本を示し、次に学生が模倣・実践する形式で進めた。経験不足の学生は、人前で話し、演じることの恥ずかしさから躊躇する姿が多くみられたが、実践を重ねて「できる」ようになると、自信も芽生え積極的に活動するようになった。

また、授業の終わりには、必ず実践ノート（講義メモ及び感想）を記入・提出させることとした。学生は、繰り返し取り組む中で教材に対する見方や考え方、さらには子どもとの関わり方や具体的な展開例等にも言及するようになり、学生の質の変容を垣間見ることができた。

<実践ノートより一部抜粋>

- ・ 久しぶりに幼いころにやった手あそびを思い出してみると、意外と覚えていた。学生同士でやっても楽しめるあそびであり、子どもと行えばもっと楽しめると感じた。
- ・ たくさん手あそびを知っているつもりだったけど、授業を重ねる中で知らない手あそびに出会って驚いた。ひとつでも多くの手あそびを子ども達に伝えたい、手あそびも対象年齢ごとに方法を考える必要があるとわかった。
- ・ 安全面への配慮をしながらも、自分でできるところはやらせて見守っているというメリハリをつけた関わりが、子どもの成長に大切なことであると思った。たくさんの工夫ができるように頑張りたい。
- ・ 子どもに教える場合は、安全に配慮して自分も楽しみ、自然に笑顔になるような活動をしていくことが大切だと感じた。

このように、教材を学生に示すことで、学生は知り、そしてできるという達成感を体感した学生は次の課題へと意欲的に取り組むことができるようになることがわかった。

表1 体育基礎技能A・B 授業内容

授業回数	実施内容	生活科単元とのつながり	
第1回	オリエンテーション		
第2回	手あそび①（基本的な技術を中心に） 1丁目のドラねこ たまごのうた トントントントンひげじいさん	1年生単元 上-なかよし みんな なかよし ともだち たくさん つくろう	
第3回	手あそび② 5つのメロンパン ずっとあいこ		
第4回	手あそび③ キャベツの中から はじまるよ かたつむり		
第5回	運動あそび①（体操を中心に） はとぼっぼ体操 ぼくた・ま・ご		
第6回	運動あそび② 「やさいもグーチャーパ」に合わせた運動あそびの創作		
第7回	リズムあそび ホーキポーキ チェツチェッコリ		
第8回	巧技台① 発育発達に合わせた教材・教具の検討		
第9回	巧技台② 学内保育所の園児による教材・教具の検証		
第10回	マット運動（お話マット、模倣あそび）		◎むかしのあそびにちょうせん かぜであそんだよ おりがみORIGAMI
第11回	お話マット（テスト）		
第12回	ボールあそび①（ボールの選び方、扱い方などを中心に）		
第13回	ボールあそび②（ボールの操作方法を中心に）		
第14回	なわあそびの実践		
第15回	まとめ		

(2) 保育内容 健康Ⅱ

授業の目標は、子どもが元気で健康に成長するために必要な知識を理論的に学ぶこと。さらに、学内保育所と地域の保育所と連携を図りながら、学生が観察・参加する形で実践的な学びから健康づくりに必要な知識を体験的に理解することである。また、講義の内容は、表2に示すように、「生活科」の単元とのつながりを考慮して、伝承あそびを教材とし、あそびの内容・方法および具体的な展開例が学べるように工夫した。

授業は、前述と同様に、まず教師が手本を示し、次に学生が実践する形態で進めた。実際に、あやとり・コマを教材とした授業を行ってみたところ、あそびの経験が学生の履修態度に大きな影響を与えていた。比較的経験している“あやとり”は積極的であるが、逆に“コマ”は消極的であった。コマの回し方について教示し、できるようになった学生は、さらに紐の上でコマを回す新たなあそびに挑戦する姿の変容もみられた。したがって、より多くのあそびに触れさせて体験させるような講義内容の構築が、不可欠であると考えた。

さらに、本授業では、幼児期の子どもと触れ合うことができる（座学だけでなく、子どもの様子や保育者の具体的な指導、援助の方法を直接肌で感じて学ぶ）機会が必要であると考え、地域の保育所との連携を講義に導入し、学生に保育現場での体験をレポート課題としてまとめさせ、発表の場を設定した。

<実践ノートより一部抜粋>

- ・ 想像以上に小さい子どもたちに、高さは大丈夫か、平均台はできるであろうかと思っていたけれど、手を引いてあげるとしっかりと立っていたし、自分で下りたりしてあそんでくれた。
- ・ 2歳と4歳では、自分で障害物を見て判断していた。真似をして、動きを覚えていくことが印象的でした。
- ・ ボールあそびでは幼い子どもの立場、保育者の立場とそれぞれの役割に応じた考え方が必要であり、あそびにアイデアを加えるとさらに楽しくあそぶことができることも学べた。
- ・ なわとびは、ひとりでおこなうことも重要であるが、大人数でやること、ひとりでできることよりもみんなで団結することができ、充実感が味わえるあそびである。
- ・ できない子には、サポートしてあげたり、歌をゆっくりと歌ってあげたりすることが大切である。
- ・ 保育者が大げさに楽しんでやることによって、小さな子どもたちも楽しくやることができると感じた。

その結果、学生は子どもの興味、関心はあそびの種類やあそぶ環境に左右されること、さらにはあそびの場の環境整備や保育者の具体的な関わり方など、現場でしか学習できない種々の場面に遭遇することにより、より現場に即した課題設定や課題解決に意欲的に取り組む姿勢へと深化していくことがわかった。

表2 保育内容 健康Ⅱ 授業内容

授業回数	実施内容	生活科単元とのつながり
第1回	オリエンテーション	
第2回	伝承あそび①(自然を中心に)	◎むかしのあそびにちょうせん かぜであそんだよ おりがみORIGAMI 2年生単元 下 はっけん はっけん くふう おもちゃづくり たのしいおもちゃ
第3回	伝承あそび②(季節を中心に)	1年生単元 上 なかよし あきとふれあおう
第4回	伝承あそび③(あやとり・コマ)	ふゆとなかよし がくしゅう どうぐばこ
第5回	体験学習の事前指導	1年生単元 上 なかよし おしえてもらったよ 交流 地域 まわりのひとびと
第6回	地域の保育所見学①	
第7回	地域の保育所見学②	1年生単元 上 なかよし
第8回	地域の保育所見学③	むかしのあそびにちょうせん
第9回	地域の保育所見学④	2年生単元 下 はっけん はっけん くふう おもちゃづくり たのしいおもちゃ
第10回	地域の保育所見学⑤	
第11回	体験学習の事後指導	
第12回	体験学習の発表①	はっけん くふう おもちゃづくり
第13回	体験学習の発表②	たのしいおもちゃ
第14回	体験学習の発表③	
第15回	課題レポート 提出	

3. 授業実践から生活科へのつながりを探る

幼稚園教諭、保育士養成課程の学生にとっては、①子どもが小学校入学前に体験するであろうあそび(種類や内容)を理解しておくこと、②子どもは学びの基礎をあそびから体得していくこと、そのためには③子どもが主体的に取り組めるようなあそびを工夫・提案する能力を身につけておくことが必須であると考えられる。

そこで、生活科の単元につながる新たな授業展開の一例として、折り紙飛行機を題材にした指導案を作成し、教材としての妥当性(伝承あそびとしての折紙、自作の紙飛行機であそぶこと、折り方の工夫など)を検証することとした(表3)。学生に実施させた結果、学生からは「造形的な活動、元気な体、健康づくりにつながる、ひとつになる」といった評価が得られた。

表3 生活科学習指導案 一例

生活科学習指導案

単元名 「はっけん くふう おもちゃ」

小単元 「おりがみ ひこうきをとばしてたのしもう」

単元について

本授業は、折り紙の紙飛行機を作成する活動を取り入れる。そして、互いに完成した紙飛行機を飛ばし合う活動を通して、飛ぶ、飛ばない等の感想から互いの紙飛行機をくらべるなかで、より遠くに飛ぶ紙飛行機を見つけ出すことに関心を持ち、追究し根気強く取り組む姿をもとめる。

目標

いろいろな紙飛行機を飛ばして楽しむなかで、友だちと取り組むことと仲間のよさに気づきながら活動することができる。

展開

主な学習活動・意識	○指導上の留意点 ◎支援 ●評価	準備
<p>1. 本時の活動を知る。 【おりがみ ひこうきをとばしてたのしもう】</p> <p>2. いろいろな紙飛行機を紹介する。</p> <p>3. 飛ばして、あそぶ。</p> <p>4. 見つけたこと、感じたこと、きづいたことをワークシートに書く。</p> <p>5. 活動を振り返る。</p> <p>6. 次時の活動を知る。</p>	<p>◎折り紙飛行機を児童に紹介する。すべての折り方で1つずつ作成しておく。</p> <p>○与えられた教材を大切に、友だちと仲よく、互いに交代しながら遊ぶことができるようにする。</p> <p>○校庭の遊具から離れた広い所で遊ぶように注意する。</p> <p>●友だちと楽しく遊ぼうとしている。</p> <p>◎よく飛ぶ飛行機を見つけ遊んでいる子を称賛し、活動意欲を高める。</p> <p>◎活動が停滞している児童には、友だちのあそびに参加するように声がけをしていく。</p> <p>●飛ばし方の工夫を見つけ、楽しく活動している。</p> <p>○あそびを終えた子どもたちから、ワークシートにまとめる。</p> <p>◎紙飛行機の違い、投げ方の工夫を自分なりに表現していることを称賛し、ものを比べてあそびを工夫することにより、変化していくことに気づかせる。</p> <p>●各紙飛行機の形の違い、投げ方の工夫に気づいている。</p> <p>○本時で気づいた紙飛行機の違いから、自分が折ることができる紙飛行機を見つけ、折ってみたいという意欲を奮起させる。</p> <p>○片づけをしっかりとさせる。</p>	<p>折り紙 折り紙飛行機 ワークシート ホワイトボード</p>

4. まとめ

平成 22 年度より新カリキュラムを構築することを目的にオムニバス形式の講義を行ったその結果、今の学生たちは保育者を目指すにも関わらず、あそびの体験不足が明らかとなった。しかし、講義などを通して一度でもあそびを体験させれば、次時の授業への意欲や関心が高まり教材の研究や開発へも積極的に参加するようになることもわかった。

そこで、講義内容をより多くのあそびが体験できるように工夫し、現場実習も積極的に取り入れるように改良した結果、学生たちは、

- ①園児たちが小学校入学前までに体験するであろうあそびを理解し、
- ②あそびに隠されている学びの基礎
- ③主体的に遊ばせるための方策

について漠然とではあるが、理解するようになってきた。

本研究は、体育の見地からみたものであり、今後は理科や算数科など他教科との連携も図りながら、新しいカリキュラムを構築することを課題としたい。

参考文献

- 1) 水上義行『過去 20 年間の生活科教育における諸発展と今後取り組むべき諸問題』富山国際大学子ども育成学部紀要 第 33 巻 p 119～ p 128
- 2) 京都教育大学生生活科研究グループ『生活科の教育内容・方法に関する研究』京都教育大学環境教育研究年報第 1 号 p 129～ p 161 (1993)
- 3) 野田敦敬、永田真吾『子どもの生活科学習への思いについての調査研究－付属岡崎小学校第 3 学年・第 6 学年及びその卒業生への調査を基にして－』愛知教育大学研究報告、 p 11～ p 18 (2005)
- 4) 福田啓子『小学校生活科の意義と課題－幼稚園教育との関係－』東京家政大学研究紀要 第 36 集 (1) p 105～ p 112 (1996)
- 5) 文部科学省『平成 20 年 6 月 小学校学習指導要領生活科編』